

地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築

－まち歩きによる地域への愛着意識の醸成に向けて－

土屋 薫*・須賀 由紀子**

要 約

長寿化とともに核家族化や少子化、さらに都市部以外で人口減少が進むということは、地域社会が自立した単位として存在することの難しさを予見させる。互いに支え合うべき住民だけでなく、それに伴ってまちづくりに積極的に参画しようとする地域住民の絶対数も減少すると考えられるからである。したがって、若い頃から地域に愛着を感じ、自分たちの住む地域をよりよいものにしていきたいという意識を持たせることは、これまで以上に重要な意味を持つ。

一方、交通手段が発達し、流動性の高まった現代社会においては、日常生活の移動範囲内に、自分と生活感覚や常識の異なる地域が数多く存在する。どの地域でもすぐさま自分の地域を異化してとらえる来訪者を受け入れられるし、誰でもすぐさま来訪者として自分の居住する以外の地域に赴くことができる。

地域への愛着意識とは、自分と馴染みのない地域においてストレス負荷がかかった際、その地域の人々に受け入れてもらえたときに生まれてくるものである。すなわち、来訪者が地域にとって異分子のままではなく、人間関係を築きながら地域に受け入れられていく中で、地域への愛着の意識が芽生えるものと考えられる。

本研究では、地域を異化する来訪者の視線について地域住民に還元する場を意識的に設けることで、同化に向けたベクトルの転換を図った。その際、既に地域と関係性を築いている大学生を、来訪者である高校生と地域社会の間に置いたところ、インタープリターとしてだけでなく、ストレスに対するバッファとしても機能することがわかった。萌芽的にはあるが、これは地域を支える循環的な社会関係資本の仕組みづくりにつながるものとして、位置づけることができる。

キーワード：来訪者、関係人口、SD法、地域愛着

1. はじめに

1-1 研究の背景

長寿化や核家族化、さらに少子化、高齢化の進展は、20世紀に形作られた地域社会やコミュニティのあり方が変わらざるを得ないことを示している。地域という概念は行政区画を意味する「リージョン」と生活圏を意味する「コミュニティ」の両者を含んでいるが、定住人口が税収と直結していることを考えれば、千葉県流山市に見られるような一時的・例外的な事例を除いて、これまで

のやり方ではうまく機能していかないという地域社会の「地盤沈下」は疑う余地がないだろう。

日本におけるコミュニティの議論の端緒は、奥田道大による地域社会の分析枠組みの提案に見られるが、「地域共同体モデル」・「伝統型アノミーモデル」・「個性モデル」・「コミュニティモデル」といったモデル化は、地域への愛着の有無を軸としつつも、規範＝期待概念として、生活の現場というよりはエスニシティの議論に収束していく。

地盤沈下しつつある地域社会の中で生活の場におけるクオリティを守るための議論は、地域の価値あるものを皆で大切に＝シェアするという視点でとらえれば、「共有地」としての地域のあり方を模索するという方向に展開していく。現代社会の文脈では入会地のような「伝統的コモンズ」

2018年11月30日受付

* 江戸川大学 現代社会学科教授 レジャー社会学

** 実践女子大学 現代生活学科教授 生活文化論

ではなく、自分たちが愛着を持って共有できる居場所としての「都市コモンズ」づくりという方向性へ向かいつつある。

ただいづれにしても、現在では、共有する場は必ずしも「定住民」の範囲内に収まりきらない。たとえば「趣味のコミュニティ」というとらえ方が可能なのは、従来定住の範囲内で行われてきた各種の往来が、交通手段の発達をベースにして、定住を超えた範囲においても可能になったことにほかならない。

そのように、離れた場所にある価値を共有しようと集まる来訪者を、かつては観光客と位置づけていた。2006年の「長崎さるく博」以降、観光の現場において「まち歩き」がブームとなったのも、地域の価値をシェアしようとするあらわれとしてとらえることができる。2014年から言われ始めた「関係人口」もその地域のファンとかサポーターを意味する言葉であって、定住者と観光客の「間」に位置する人たちのことを指す。ある意味でこうした「まち歩き観光」ブームは、「モノ」を消費するのではなく、できごと（体験）を共有（シェア）する（ものの所有ではなく使用価値を重視する）ことを志向していると考えられる。すなわち、「まち歩き観光」は関係人口づくりの仕組みとしてとらえることができる。

このようにとらえると、どうやって、そうした人たち（＝地域のファン、サポーター、すなわち地域の価値を共有しようとする人々）を集めるのが、これからの地域の課題と言える。逆に言えば、まちに住む人や自然、歴史、景観、ライフスタイルなどが感じられる「まち歩き」は、地域の価値を共有（シェア）して共通の居場所として確認する手法として有効であることがわかる。

もちろん来訪者だけではなく、本来定住者も自分の地域を見直すべきだし、逆にニュータウンなどは定住者全員が来訪者と言えるわけで、ニュータウンにおけるまちの担い手作りも同じ文脈で理解することができる。つまり、定住者と来訪者のどちらが主かということではなく、両者の相互作用をどう構築するかが、地域を支える社会関係資本形成の仕組みづくりにおいて重要であることがわかる。

1-2 研究の目的

そこで本研究では、来訪者に地域の価値を探してもらい、それを地域住民に還元することで、地域を振り返り、愛着を持つきっかけづくりをすることが可能かどうか、検証することを試みた。

またその際に、きっかけづくりの媒介として「大学生」という存在に着目した。

多くの大学生は、学生の間に住む／通う場となる地域にとっては「来訪者」である。その意味で、地域を異化する存在であるが、大学生は「まち歩き」の当事者となることで、自ら地域への同化を経験することができる。ここで言う「同化」とはすなわち、地域の価値を共有する体験を経て、地域のファン、サポーターになるということである。在学中に、専門としてであれ専門外であれ、地域活動を通して、地域への同化体験をする大学生は、これからの地域の社会関係資本の礎として重要な要素であると考えられる。

また、大学生が、中学生や高校生および地域の勤労世代の大人という、今や「地域」にもっとも関係の薄い世代を地域につなぎ、地域を支える社会関係資本の循環的形成の担い手となりうるか（＝どのようなプログラムであれば、そうなりうるか）を検証する上でも、大学生によるプログラムの展開を軸とした。

2. 実験の概要

2-1 研究の方法

以下（1）～（3）の実施をもとに、地域を支える社会関係資本形成の仕組みの構築に向けての検討を行う。

（1）来訪者（大学生・外部高校生）を対象としたプログラムの実施

江戸川大学社会学部現代社会学科において実施している高大連携プログラムの場を採用した。訪問者としての大学生が自身の感覚を住民へと還元する際に、当事者としての視点を持続させることを意図したからである。当学科における高大連携プログラムは常に、大学生がホストとして高校生

を迎え、自分たちの学びを自身の手で高校生たちに伝える形を取ってきた。もちろんこの手法は、大学での学びを深める意図を持っているが、ある意味で大学生を地域のインタープリターとして高校生の前に立たせることになる。ホストとしてゲストを迎える立場に立たせること、その後さらに今一度、自分が来訪者として地域住民のまなざしと向かい合うとき、異化と同化のあいだで揺れる感性こそが、住民に地域の豊かさを再認識させる契機となるのではないだろうか。そうした意味を込めて「来訪者」としての高校生を回答者（被験者）に加えた。コーホートとしては、地域外の学齢期の若者による意見ということになる。

実施に向け、準備会を重ねて調査地の地域理解をはかった上で、調査地の景観を捉えるSD法の調査票を作成して、2018年8月2日～8月4日の日程で、高校生に向けてのまちあるきプログラムを大学生が実施した（表1。まちあるき実施日

表1 準備作業日程

日程	作業内容
2018年3月29日	第1回現地踏査
4月14日	KJ法によるキーワード抽出
4月29日	形容詞対の抽出
6月23日	第2回現地踏査
7月28日	第3回現地踏査

SD法（意味微分法 Semantic Differential Method）調査票 2018

地点No.	日付	時間	氏名	ID	入力担当

★ この場所で感じることであてはまると思う数字（1～5）に○をつけてください。
すべての形容詞の横に丸をつけてください。横めきずには○をつけてください。

非常に思う 1 2 3 4 5 非常に思う 1 2 3 4 5

新鮮い 1 2 3 4 5 ゆかりのある ()

印象が強い 1 2 3 4 5 忘れられない ()

きれいな 1 2 3 4 5 年季のある ()

親しみのない 1 2 3 4 5 なつかしい ()

果敢な 1 2 3 4 5 手の込んだ ()

整った 1 2 3 4 5 複雑な ()

身近な 1 2 3 4 5 貴重な ()

一般的な 1 2 3 4 5 個性的な ()

明るい 1 2 3 4 5 暗い ()

人工的な 1 2 3 4 5 自然的な ()

にぎやかな 1 2 3 4 5 静かな ()

よそよそしい 1 2 3 4 5 あたたかい ()

わくわく 1 2 3 4 5 まったり ()

ストレスを感じる 1 2 3 4 5 癒やし ()

気づいたこと・感想

図1 SD法調査票

は8月3日)。SD法調査票は、地域には「こだわり」があり、まちあるきという「きっかけ」があり、現地で「発見」があり、地域における「居場所」づくりにつながり、地域愛着が形成されるきっかけとなる、という仮説に基づいてワードを抽出した（図1）。

(2) 訪問者プログラム（大学生・外部高校生対象）の地域社会への還元

地域にとっての来訪者である高校生の意見を、当該地域の大人（住民）にフィードバックした。

(1)の高大連携のプログラムは、H市N地区市民に協力をいただき、本実験に参加した大学とで、対象調査地の実踏をした上で実施されたものであった。そこで、この協力市民に対して、高校生と大学生が行ったまちあるき結果をフィードバックする発表を、学生Wが2018年8月24日に行った（図2）。市民からは、「来訪者の高校生が、調査地の坂に名前をつけながらまちあるきをして、地域への気づきのきっかけとする」という、高大連携の際に学生が考えたプログラムに関心が寄せられ、この後に企画された市民向けのまちあるきプログラムに活かされることになった。そして市民の皆さんで坂に名前を付けながらルートを歩き、各自がつけた坂の名前を最後に発表しあって一つの名前に決め、地域への思いを共有することを目的とするまちあるきプログラムが生まれた。

さらに、坂に名前を付けて歩くだけではなく、地域の季節の特産物を使ってケーキを作っている地元のこだわりのケーキ店に特別仕立てのバウン



図2 高校生による坂マップ

ドケーキを焼いてもらい、当日の参加者に地元の味わってもらえるよう工夫した。そして、飲み物には、地域との関係づくりに積極的なコーヒーチェーン店のSコーヒーに協力をお願いし、参加者に飲み物をサービスで提供してもらう、という仕立てとなった。参加者は、市の公報を通じて募集したほか、近隣小学校へも参加者の誘いかけをした。

(3) 地元中学生を対象としたプログラムの実施

来訪者である高校生と行った高大連携まちあるきのプログラムを、地元中学生を対象に実施するための取り組みを行った。調査研究に協力してもらえる中学生を得るために、市の担当者を介して、児童館とのコンタクトを行った。8月23日および8月24日、二つの児童館館長へ、まちあるき企画のねらい、実施方法、終了後にアンケートを取らせていただく旨の了解を得た。

まちあるきの実施は大学生が行うが、実施日までに、中学生との信頼関係を築くことが必要と考え、児童館の交流プログラムに計3回参加し、中学生との関係づくりを行った。そして、中学生から得た意見をもとに、まちあるきルートを設定した。ただし、事前に当日参加の応募制はとることができず、当日は、児童館に来て遊んでいる中学生にも声かけをして、実施を行った。

2-2 プログラム参加者の選定と実施日

(1) の来訪者プログラム（大学生・外部高校生対象）は、江戸川大学男子学生3名と実践女子大学学生2名の5名に加え、高大連携プログラムに参加した神奈川県総合学科高校生（男子3名、女子7名）の計16名を対象とした。実施日 2018年8月3日

(2) の来訪者プログラム（大学生・外部高校生対象）の地域社会への還元に関しては、H市民30名を対象とした。実施日 2018年11月17日

(3) の地元中学生を対象とした大学生プログラムは、H市中学生4名を対象とした。実施日 2018年10月20日

2-3 対象地域

(1) 来訪者（大学生・外部高校生）を対象としたプログラム

当該エリア（H市N地区）は南北約1.8km・東西約1.4kmにわたる面積に及ぶので、エリア内道路の総延長を考え、評価の対象地点を6地点に絞った。また、JR中央線によって大きく南北に分断されているが、JR中央線の南側に絞って抽出した（図3）。

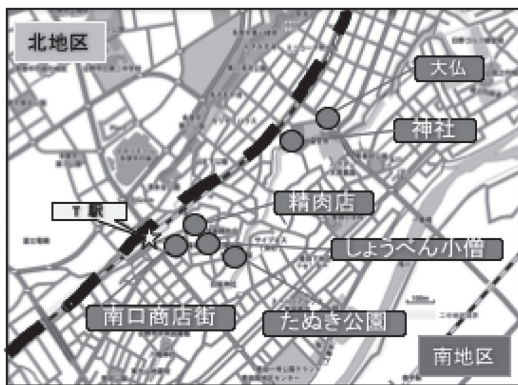


図3 調査対象地点

(2) 来訪者プログラム（大学生・外部高校生対象）の地域社会への還元

(1) と同じく、まちなみの風景の起伏が楽しめるJR中央線の南側でルートを作り、評価の対象地点を10地点に絞って抽出した（図4）

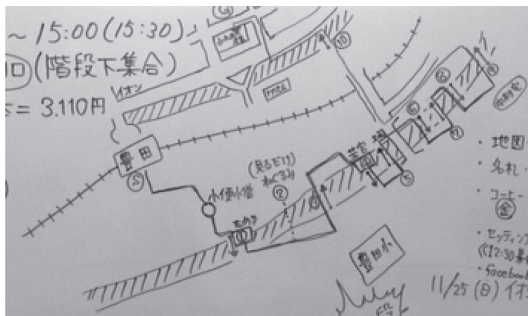


図4 地域住民によるまちあるきルート設計

(3) 地元中学生を対象としたプログラム

地元の中学生にとって馴染みのあるエリア（H市O地区）からルートを設定し、景観を評価する対象地点を10地点に絞った（図5）。



図5 中学生とのまちあるき

3. 実験の結果

(1) 来訪者（大学生・外部高校生）を対象としたプログラム

当該地域の景観の印象を測るSD法の結果で一番高かったのは情緒的要素であった。他の要素はほぼ平均で、住民の視点と訪問者（学生）の視点に殆ど差異は無かった。SD法を取り入れたまちあるきは、地域住民と来訪者がお互いの観点から地域の魅力を知り、関心をもち、地域活動の仲間を増やすきっかけになったと思われる。この繰り返しは社会関係資本づくりにつながると思われるが、住民が把握している地域の価値と来訪者の感じるものにどれだけの差異があるのかをSD法をもとに捉えるという点では、情報を共有する端緒

となったと言える。

またプログラム実施後に、本プログラムで、まちに対してどのような関心を持ったのかを聞いた。その結果、「ひと・歴史・自然・まちなみ・ライフスタイル」の中では、自然、歴史への振れ幅が大きく「レトロ」感を感じていることがわかった（図7）。当該地域は、地元の人にとっても、「昔ながらの自然の良さ、歴史が感じられる地域」と感じられている場所であり、その魅力が、来訪者にも同様に受け取られていることがうかがえる。また、「まちと生活はつながっている」「その土地の特性を活かして生活している」というコメントが高校生から得られており、生活と地域とのつながりを、高校生もこのまちあるきを通して感じていたことがわかった。

このまちの魅力をどのように感じたか

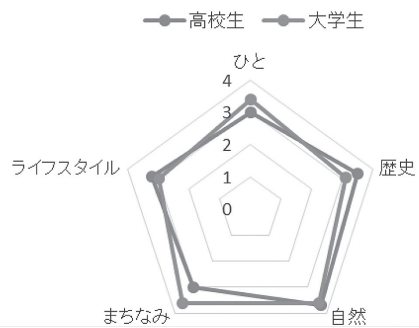


図7 まちの魅力の捉え方

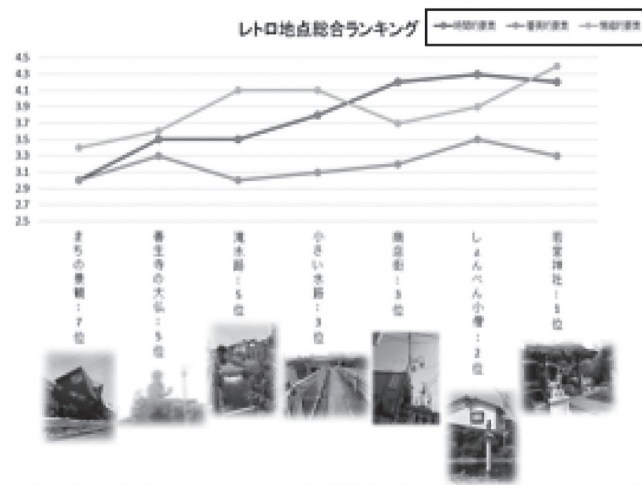


図6 全体の得点（平均点）

今回のプログラムは、高校生も大学生にとっても、自分の地元を振り返るきっかけとなっており、「地域」に目を向けることのできるまちあるきとなっていることが確かめられた（図8）。特に、今回の実験対象者の高校生と大学生を比べると、大学生の方が日常的には地域への関与度が低い傾向がみられる（図9）。その大学生にとって、今回のまちあるきプログラムは「地元を振り返るきっかけとなった」という意識が強く出ていることから、こうしたまちあるきプログラムが、大学生が地域へ目を向けるための有効な方法であることが示唆される。

一方、プログラム全体の満足度としては、高校生は全員が「満足」「やや満足」だったが、大学生は意見が分かれた（図10）。大学生からは、難しかったこととして、「SD法を教えること」「高校生に伝えること」「企画をまわすこと」「もう1日増やしてほしい」「事前の打合わせが不十分だったことが反省点」といった意見が出されている。このことから、本プログラムは、プログラム受益

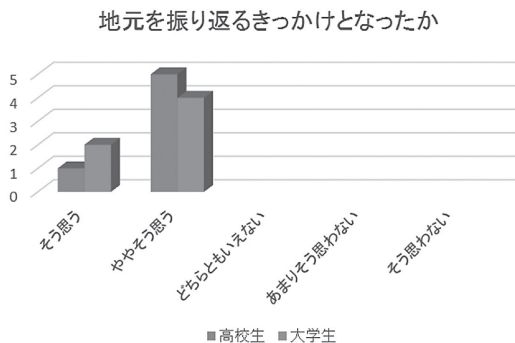


図8 まちあるきプログラムの成果

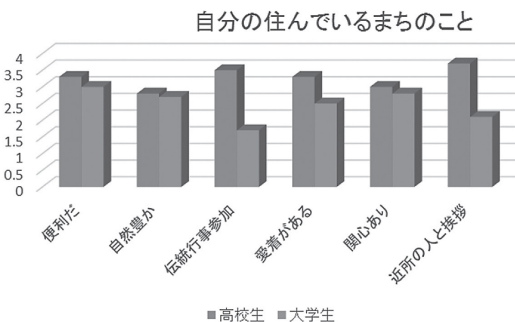


図9 日頃のまちへの関与度

プログラムの満足度

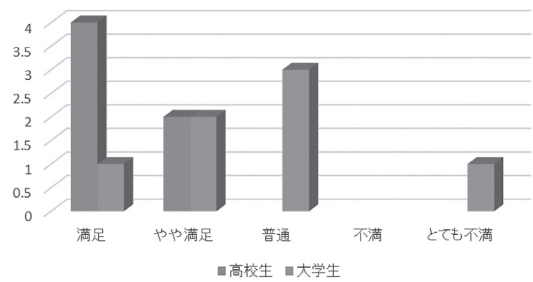


図10 プログラムの満足度

者にとってはよいが、プログラム運営そのものは簡単ではなく、事前準備をきちんとしなければ満足の結果とはならないことがわかった。

(2) 来訪者プログラム（大学生・外部高校生対象）の地域社会への還元

まちあるきのルートは、「くだる」「のぼる」の繰り返しで、この地域の高低差を楽しみながら、まちの風景に目を向けるという形で設定して実施された。

坂の名前をつけるにあたっては、このまちで育った地元の方の話を聞いたり、通りがかりの人に、地元の人がつけている通称はあるのか、といったことを聞きながら、歩いた。こうした話の情報が、まちを知るきっかけとなった。

当日は、小学5年生の女兒とその母親、一方で、80歳になる高齢女性の参加もあり、多世代が混ざり合う交流会となった。

坂の名前については、まちあるきの道中でタブレットで撮影した写真を、プロジェクターを使って写し出しつつ、参加者がそれぞれ付けた名前をホワイトボードに書き出し、どれが一番よいか、挙手して多数決で決定していく方式を取った。和気あいあいとした交流となった（図11）。

列挙された坂の名前を、高校生がつけたものと比べてみると、高校生は感覚的に捉えた坂の名前、大人（市民）は視覚的に捉えた坂の名前となっており、世代の違いがみられ、まちを見ている目線や感じ方が違うことが改めてわかり、地域の多世代の存在を感じる機会となった（図12）。



図 11 まちあるき交流風景

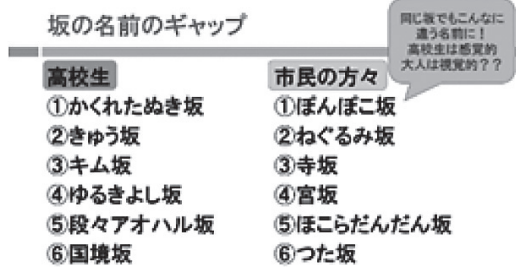


図 12 高校生と大人の捉え方の比較

このまちあるきにおいては、SD法は実施しなかったが、「坂の名前をつけて歩く」という、高大連携プログラムにおいて実施した、地域の魅力に気づく方法を大人にも応用したことにより、大学生を媒介として、地域に目を向ける多世代のつながりが生まれた。

(3) 地元中学生を対象としたプログラム

この地元中学生対象のまちあるきでは、地域の大人が「居場所」と思っているところと、中学生自身が「居場所」と思っているところを実際に歩き、「居場所」の違いを知り、まちへの愛着をはかることに置き、地域にとっては来訪者である大学生の中でも、地域愛着を感じつつある大学生がルートを設計し、実施した。当日は、児童館職員も同伴して、まちあるきを行った。

地域の「居場所」の「居場所感」をはかるためのSD法の形容詞対のワーディングを、原田・滝脇(2014)の「居場所尺度」を採用して行った。これは、居場所を、「社会的居場所」と「個人的居場所」の二つに大きく分け、さらに、「社会的居場所」として所属的居場所・受容的居場所・承

認的居場所の三つ、「個人的居場所」として内省的居場所・解放的居場所の二つに分けて捉えるという分け方である。「所属的居場所」とは、何らかの集団に所属していることで帰属意識を持ち、自己の存在が安定していることを実感できる場所である。2つ目の「受容的居場所」は、他者に愛され、無条件でありのままの自己が受け入れられていることを実感できる場所である。3つ目の「承認的居場所」は、自己の力を発揮し、その成果が他者に認められたり他者の役に立ったりすることで、自己を価値あるものとして実感できる場所である。4つ目の「内省的居場所」は、自己について客観的に思考や内省を行い、自己を再構成する場所。5つ目の「解放的居場所」は、現実社会から逃避し、自己に休息とエネルギーが補給される場所である。以上5つの居場所のそれぞれに対応するワーディングを考えて、SD法の調査票とした(図13)。そして、全体で10箇所の地点でのSD法調査を準備した。

図 13 大学生が用意したSD法評価表

また、ルート上にあった店舗の中から、地元に着してこだわりの商品提供を行っているカフェと手作りパン店に、あらかじめインタビュー実施の依頼をしておき、当日、中学生が訪問した際に話が伺えるようにした(図14)。

図 14 大学生が用意したインタビューシート

当日の参加者は中学 1 年生男子 4 名、実施者は、大学生 2 名で行った。天気は晴れていたが、まちあるきの最後で急に雨となり、予定していたルートを少し省いて急いで終了した。

参加者 4 名ではあったが、プログラム全体の満足度については「満足」「やや満足」あわせて 3 名（1 名は無記入）となっており、プログラム自体の満足度は得られていた。面白かったこととしてあがったのが「インタビュー」「全体的に」「友達と一緒にだったこと」ということである。内容面の楽しさとメンバーの楽しさが、まちあるきプログラムのポイントとなることがうかがえる。難しかったこととして、4 名のうち 2 名が「SD 法」を挙げた。今回のプログラム全体を通して一番学べたことは、「インタビュー」「自然が多いこと」が挙がっており、実際に地元で働く人の話を聞いて得たこと、あらためて自分の住んでいる地域に自然が多いことの認識が得られていることがわかる。今回の参加が、自分の住んでいる地域（地元）を振り返るきっかけになったかどうかを訪ねる設問に対しては、「そう思う」2 名「ややそう思う」

1 名「どちらともいえない」1 名、という結果であった。本まちあるきプログラムは、おおむね、自分の地域を振り返るきっかけになっているといえる。また、大人の思う居場所と、中学生が思う居場所の感じ方を SD 法で測定したり、大人が居場所と思っているところを中学生に紹介したりして、大人の意見を中学生に伝えるという方法での地域理解をはかることができたと考えられる。

4. 考察と今後の課題

本研究では、少子高齢化、人口減少が本格的にすすむ中で、地域社会を支える上で大切な社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を、いかに循環的に形成しうるかを問いとして、実験的取り組みを行い、その成果について検討を行った。地域を支えるには、「地域への愛着」を感じる人を育てることが必要である。そのための方法論として、地域の人や自然、歴史、景観、ライフスタイルなどに目を向けるきっかけとなる「まちあるき」を採用した。また、「まちあるき」を実施する主体として「大学生」という存在に着目した。大学生の多くは、在学中に通う／住む地域に対しては「来訪者」である。卒業と同時に、その地域から縁遠くなることが多い。そうした来訪者が、生活者の暮らしが感じられる「地域」に目を向けて、地域に同化していくプロセスを経験する中で、地域の大切さを知り、地域の暮らしへの意識を持っていくことは、その後の地域の社会関係資本の礎となると考えられるからである。また、大学生は、中学生・高校生と勤労世代の大人の間に位置し、真面目な生活者の意識に近づきながらも、子どもの遊び心を遊ぶことができる。この大学生を介して、中高生と大人をつなぎ、彼らの関心を地域につないでいく意義も大きいと考えられる。

今回の一連の実験では、市民のまちあるきプログラムに参加した大学生が、地域の「来訪者」としての視点から感じた対象地域の価値を、高校生に伝えるまちあるきルートを作り、大学生の学修を活かして、SD 法とインタビュー法を取り入れたまちあるきを行った。その結果、「来訪者」であった高校生に、

この地域のまちなみやライフスタイル、暮らし方に目を向けるきっかけとなる方法であることが確認された。さらに、このプログラムで得た高校生の見方を、大学生が媒介となって、今度は、対象地域の市民にフィードバックした結果、地域の価値共有ができる、新たなまちあるきプログラムが生まれた。このプログラム実施により、地域に関心を寄せる新たな「来訪者」が増えたり、日頃から地域の一員として存在している店舗と地域の人々とのつながりも生まれた。さらには、高校生とのまちあるきを行った大学生が、地域の児童館の協力を得て、中学生のための独自のまちあるきのルートを作り、中学生とのまちあるきを実施した。参加した中学生からは、「自分の地元をより知ることができた」という意見を得、大学生が媒介となって多世代がつながり、地域に愛着を感じていく層を増やしていく可能性が確認された。

以上のように、来訪者でありながら地域について学ぶ「大学生」がつなぎ役となって、地域の大人と定住者の一員である高校生・中学生をつなぐことにより、「地域」に愛着を持ち、地域と関係をつくっていく人を増やす可能性が確認できた。このことから大学生と地域をつないで行うまちあるきは、テーマパークのアトラクションのような一過性のものではなく、様々な場所や人を対象して継続できるものであり、持続的・循環的に社会関係資本（ソーシャルキャピタル）を形成するものとしての可能性があるという位置づけられる。

しかしながら、まちあるきの難点は、効果的なまちあるきプログラムにするために、手間ひまをかけた準備や振り返りが必要なこと、参加者の安全への配慮、実施日の天候によしあしに左右されるなど、「そう簡単にはできない」ということである。本実験に参加した大学生からも「下見をもっとすればよかった」「時間不足」「高校生に集中してやってもらうこと」「わかりやすく伝えること」「SD法の分析」などが難しさとして挙がっている。そうした難点を超えて、今後の地域の社会関係資本の形成と位置付けるまちあるきを継続していくためには、地域自立社会づくりを真摯に捉える行政や地域の様々なステークホルダーとの協力関係などが必要となろう。

最後に、本研究は、地域を異化する来訪者の視線を、地域住民へ豊かさの実感として還元するしくみづくりについて検討してきた。住民が把握している地域の価値と来訪者の感じるものにどれだけ差異があるのかをとらえるという点では、本研究は、来訪者側の視点を提供するという点でその端緒となったと言える。ただそれを本格的に実現するためには、同様の実験的試みを、あらためて地域住民を対象に行う必要があると考えられる。今後も、地域の社会関係資本の循環的形成のしくみづくりに向けて、実施場所や対象などを変えて実施し、プログラムのあり方を探求していきたい。

参考文献

- 茶谷幸治, 2008, 『まち歩きが観光を変える 長崎さるく博 プロデューサー・ノート』学芸出版社
- 藤田弘夫, 2006, 『地域社会と地域社会学』『地域社会学の視座と方法』東信堂
- 原田克己・滝脇裕哉, 2014, 「居場所概念の再構成と居場所尺度の作成」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』第6号
- 井口貢, 2007, 『まちづくりと共感, 教育としての観光 地域に学ぶ文化政策』水曜社
- 岩佐恭子, 2017, 「ニュータウンから探る, まちの担い手が育つコミュニティ」『コミュニティ政策 16』コミュニティ政策学会
- 小林修一, 2002, 「コミュニティ意識の諸相」『転換期の地方都市と福祉コミュニティの可能性』梓出版社
- 前山総一郎, 2017, 「都市内分権とコモンズ 社会関係としてのコモンズのコンセプト(P.ラインバウ)を基に」『コミュニティ政策 15』コミュニティ政策学会
- 三好和代, 2008, 「少子高齢社会における居住地の選択および地域コミュニティの変容」『21世紀の地域コミュニティを考える』ミネルヴァ書房
- 土屋薫, 2015, 「オープンガーデンにおける交換過程に関する考察ー着地型観光における交流の構造把握に向けてー」『江戸川大学紀要』25号
- 土屋薫, 2013, 「着地型観光支援ツールとしてのデジタルマップの可能性ー観光情報とルート選択に関する考察」『江戸川大学紀要』23号
- 『高大連携によるアクティブ・ラーニング』江戸川大学・実践女子大学大学間連携事業報告書 2018

